The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	唐代漠南のウイグル遊牧民とウイグル可汗国 ： 「李秉義墓誌」・「回紇瓊墓誌」の検討を通じて
Author(s)	齊藤, 茂雄
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2020, 54, p. 53-81
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91373
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

唐代漠南のウイグル遊牧民とウイグル可汗国

──「李秉義墓誌」・「回紇瓊墓誌」の検討を通じて──

齊藤　茂雄

キーワード：内陸アジア史／中国史／古代トルコ民族史／回紇瓊墓誌／李秉義墓誌

はじめに

モンゴル高原では、突厥第一可汗国（552 ～ 630 年）が建国されて以来、トルコ系遊牧民が優勢となり、突厥第二可汗国（682 ～ 745 年）、ウイグル可汗国（744 ～ 840 年）といった遊牧国家が、ゴビ以北の草原（漠北）に拠点を置きつつ建国され、南方の北朝隋唐王朝と対峙することとなった。

一方で、ゴビ以南の草原（漠南）には、北方の遊牧国家から離脱した遊牧民が中国王朝の支配下に滞留し、騎馬軍団として利用される反面、反乱の温床ともなって中国史を展開させる原動力となっていたとされる［石見 1999］。

特に唐代には、漠南のトルコ系遊牧民は、その羈縻支配下で唐朝の軍事的優位を支えた［石見 2008, p. 69］ほか、安史の乱の反乱軍を構成する勢力となったこと［森部 2010, 2011B, 2013］や、唐後半期の節度使体制下でも重要な軍事力の一端を担ったこと［村井 2003；2015；山下 2011；2014；西村 2018（2016）］などが、近年中国で次々と発見される石刻史料を利用することで明らかとなっており、研究の進展が極めて著しい。

とはいえ、それらは唐王朝の軍事制度や、その国際性・多民族性の解明を目的とした研究がほとんどで、遊牧民族史の視点から漠北・漠南を一連の草原世界と見なし、唐支配下の漠南遊牧民と、北方の遊牧国家との関係性に焦点を当てる研究は少ない。南北の遊牧民を切り離すことなく一体のものとし

て理解することで、草原世界と中国本土を一体のものと見なす、「東部ユーラシア史」[1] がより立体的に理解できるであろう。[2]

以上のような問題意識からウイグル可汗国期を見つめ直せば、第2代磨延啜可汗（在位747～759年）、第3代牟羽可汗（在位759～780年）[3] の時代に、ウイグルは南方へ強い関心を持っていたことが先行研究によって指摘されていることに気がつく。すなわち、安史の乱（755～763年）への介入を行い、そこで得た人や財貨の収容のために、漠北においてバイバリクなどの都市建設を促進させたこと、[4] 中国本土への征服も企図して「早すぎた征服王朝」と呼ばれうること［森安2015A（2002）, pp. 157-163］などである。それゆえ、南進する中途に位置する漠南の遊牧民ともなんらかの関係を持っていた可能性が高いが、先行研究ではほとんど論じられていないのである。[5]

そんな中、李浩［2016］によって、新たにウイグルの「李秉義墓誌」が拓本写真を付された形で公表された。李浩の検討は基礎的なものに留まっているが、この墓誌は安史の乱中における漠南のトルコ系遊牧民とウイグル可汗国との関わりを記録する貴重な史料であり、上に述べた問題を論じるうえで重要なものであった。幸運にも、漠南のウイグル集団の動向に関しては、石附［2011］によって基礎となる研究が行われており、この成果を利用することで本墓誌の背景を十分に理解することが可能である。

そこで本稿では、今回新たに公表された「李秉義墓誌」に、既知の史料ではあるが同時代の「回紇瓊墓誌」を加えて検討し、漠南のウイグル集団が、ウイグル可汗国の建国と安史の乱の勃発という急激な歴史展開の中で、いかなる動きを見せたのかを考察する。

さらには、被葬者とウイグル可汗との血縁関係の記述から、当時の草原世界における同族意識についても論じてみたい。

第1章　「李秉義墓誌」の問題点

まずは、「李秉義墓誌」の録文を提示し、唯一の先行研究である李浩

［2016］の紹介をしたうえで、その問題点を指摘する。録文は李浩［2016, p. 507］で提供された拓本写真をもとに、録文［李浩 2016, pp. 494-495］も参考にして筆者が作成したものである。[6)]

【史料1】「李秉義墓誌」

1. 唐故迴紇贈天水郡王李府君墓誌銘并序
2. 　　國子博士翰林學士皇太子鄭王等侍讀侍文臣張涉奉　　勅撰
3. 　　元従殿中少監翰林學士上柱國賜紫金魚袋臣呉宰臣奉　　勅書
4. 君諱秉義、字末阿波、迴紇登里頡咄登蜜施合俱録英義建功
5. 毗伽可汗之堂弟也。父移建啜　　玄宗朝嘗瞻風入覲、竭節
6. 為臣、嗣休屠之令猷、継日磾之茂績。或命衣玄甲、遠掃邊陲、或
7. 寵侍　軒墀、榮參警[7)] 夜。願留捧　日、絶望寒鄉。因封為崇義王、
8. 仍賜姓李。公即王之第四子也。武出天性、忠稟父風、弓彎六鈞
9. 矢洞七札。　　肅宗朝以痛賊臣之負國、思夏后之配天、遂翼
10. 翦鯨鯢、佐清區寓、名書彝鼎、動列太常。　　今上往居藩邸
11. 之日、奉詞伐叛、杖節専征、公又率己棣華、先鋒霆擊、每登雁
12. 陣、勢疾風趨。搴旗於萬敵之中、取馘於百鼙之下。故入則參侍
13. 帷幄、出則羽衛戎麾。未嘗不命中愜心、指蹤如意。洎　皇上握
14. 圖御極、論舊録功、授左武衛將軍、特加茅土之封、用錫河山之
15. 慶。降年未永、奄逐逝川、以大暦七年三月五日薨於長安静恭里
16. 之私第。春秋廿五。越以其年四月十日葬於京兆鳳栖原。禮也。
17. 皇上以公可汗金友、於國有婚姻之親、禁旅藎臣、念舊為勲庸之
18. 最。歎惜尤切、軫悼殊深、遂贈公天水郡王、賻絹一百疋・布五十端、
19. 喪葬所須、並皆官給。仍令尚食致祭、京少尹監護。生則輸忠七
20. 萃、歿乃銘勲九原、冢象祁連、塋封馬鬣。　君恩昭著、臣節益
21. 彰、爰命侍臣、式刊貞石、銘曰、　　天子武臣、可汗棣萼、百戦為
22. 歡、七擒取樂。縦横奮擊、馳突如飛、氣摧葛刃、勇決重圍。恩眷特
23. 深、蔵舟不固、悲逐隙駒、哀纏薤露。父畫雲閣、子銘景鍾、榮摽國

24. 姓、寵表嘉庸。禮備飾終、贈光幽壤、徽音永茂、營魂長往。

被葬者の李秉義は15-16行目にあるように、772（大暦七）年三月五日に25才で死去し、同年四月十日に葬られた。それゆえ、748（天宝七）年生まれである。李浩は、本墓誌についての検討をさほど行っていないが、遷葬地が長安の万年県鳳棲原であること、墓誌の撰者が『旧唐書』巻一二七に立伝されている張涉であることを指摘している［李浩 2016, pp. 497-498］。李浩は、さらにほかのウイグル関連墓誌を4点利用し、埋葬地や、被葬者たちの長安での立場などを比較している。

このように、李浩論文はあくまで墓誌の紹介に留まっているものの、李秉義の血縁については自説を述べている。血縁の記述は、4-5行目に「君の諱は秉義、字は末阿波、ウイグルの登里頡咄登蜜施合俱録英義建功毗伽（テングリ=イル=トゥットミシュ=アルプ=キュルッグ ビルゲ）可汗の堂弟である」とある。李浩［2016, pp. 496-497］は、本記述の「登里頡咄登蜜施合俱録英義建功毗伽（テングリ=イル=トゥットミシュ=アルプ=キュリュグ ビルゲ）可汗」を、ウイグル可汗国第3代可汗の牟羽可汗 Bögü Qaγan[8] に比定し、論文に付された系図中で、李秉義を牟羽可汗のおいに当てている。確かに、牟羽可汗については、『旧唐書』巻一九五「迴紇伝」［p. 5204］に、「（牟羽）可汗を冊立して登里頡咄登密施含俱録英義建功毗伽（テングリ=イル=トゥットミシュ=アルプ=キュリュッグ ビルゲ）可汗とした」[9] という記述があり、両者の可汗号はalpに当たる「合」が、『旧唐書』では「含」に誤写されていること[10] を除けば完全に一致することから、この可汗が牟羽可汗を指していることは疑いない。実際に可汗のおいの墓誌であるとすれば、注目すべきことである。

しかしながら、李秉義が牟羽可汗のおいであるという指摘は疑問符が付く。まず、墓誌では彼は牟羽可汗の「堂弟」であると指摘されている点が問題になる。「堂弟」とは、一般的には祖父を同じくする従弟のことであり、唐代にもその意味で使われている。[11] 字義通りに受け取れば、おいという意味にはならない。では、彼は可汗のいとこだったのかと言えば、彼の父親が唐に帰順した経緯を考慮すると疑問符が付く。まずは、「堂弟」という血縁関係から検討を始めなければいけないのである。

おりよく、我々はすでに、同じくウイグル可汗の「堂弟」と記録されている「回紇瓊墓誌」を知っている。そこで次章では、「回紇瓊墓誌」を参照しつつ、李秉義の血縁関係を考察する。

第2章　ウイグル人墓誌に見える「堂弟」について

第1節　「迴紇瓊墓誌」に見える「堂弟」

本章では、前章であげたうち、李秉義が可汗の「堂弟」であるとする記述について検討するが、まずはもうひとつの可汗の「堂弟」と称する「回紇瓊墓誌」から検討する。

本墓誌は、師小群／王建栄［1990］が最初の紹介を行い、森安［2015C］と濮仲遠［2015］による研究が存在しており、師小群／王建栄［1990, p. 90］・森安［2015C, pp. 10-11］に録文が付されているほか、拓本写真も『新中国出土墓誌』（中国文物研究所／陝西省古籍整理辦公室（編），文物出版社，2003）［陝西 2 上，p. 142］[12] に鮮明なものがある。本稿では、それらを参照し、録文のみ引用する。なお、師小群／王建栄の録文は誤りが多いため、基本的には森安の録文に従い、両者の違いをいちいち注記しない。森安の録文から改めた箇所だけ注記している。

【史料2】

1. 大唐故瀚海都督・右領軍衛大将軍・經略軍使迴紇
2. 府君墓誌銘并序。　姨弟左驍衛倉曹楊仲舉撰書。
3. 夫希代之寶、積於荊山、来儀之鳳、出於丹穴。故葉盛
4. 衣冠、門承瀚海之後、地雄虜塞、家有可汗之貴。居崇
5. 高而匪傲、席寵榮而若驚者、則公焉。姓迴紇、字瓊、陰
6. 山人也。曽卑栗、右衛大将軍。祖支、左衛大将軍。父、右
7. 金吾将軍。公初拝執戟、後遷郎将、旋拝将軍。性與道
8. 合、智若有神。獻　　天子上策、斷土蕃之右臂。故得

9. 賞延于世、　　寵冠諸蕃。公侯子孫、河岳降靈、俊心
10. 豁尓。卅従軍、習百戰之勝、廿志學尋師、知六藝之工。
11. 頃戎羯乱常、堂弟可汗、兵雄勇壮、収兩都之捷。功成
12. 未受、旋至上京、未見　闕庭、俄尓瘻疾。以乾元三年
13. 三月廿九日、終于羣賢里之私第。春秋五十有五。以
14. 四月十九日、遷厝于龍首鄉。禮也。却臨渭水、夏生草
15. 木之聲、直視終南、暁接烟雲之氣。慈父悲叫、愛母泣
16. 血、五内崩摧、肝心如裂。嗣子頎、攀號擗摽、痛深切骨。
17. 追述遺訓、以記[13] 金石。銘曰、
18. 分土命氏兮始自軒轅、應星作氣兮時稱大蕃。乃祖
19. 乃父乃祖兮懐聖殷、為王為侯兮慶流子孫。万古河
20. 山兮地久天長、泉臺一閉兮絶相望。

まず、基本的な情報として、本墓誌の被葬者「回紇瓊」は、墓誌 12-13 行目にあるように、乾元三（760）年三月に 55 才で亡くなっているので、706 年の生まれである。この【史料 2】で最も目を引く点は、墓主の「堂弟可汗」が安史の乱に従軍して功績をあげたとする 11 行目の記述である。

> 先頃蛮族（＝安禄山）が反乱を起こしたとき、（回紇瓊の）「堂弟」の可汗は、兵力は強く勇猛であったので、長安・洛陽を回復する勝利をおさめた。

既に森安［2015C, pp. 12-13］が指摘しているように、この「堂弟可汗」とはウイグル可汗国第 2 代の磨延啜のことで、安史の乱にウイグルが介入した 757（至徳二）年に、唐・ウイグル連合軍が長安・洛陽を奪還したことをこの部分では記述している。

前述したように、「堂弟」とは祖父を同じくする従弟のことであるため、回紇瓊は可汗の磨延啜と従兄弟同士でなければならない。まずはこの点を回

紇瓊の出自から検討してみる。

この墓誌の先祖は、曾祖父が「卑栗」、祖父が「支」とあるが、両者ともに羈縻支配期のウイグル首長で、前者が「比栗／比来栗／比粟毒」などと記録される人物、後者がその子の「独解支」であることが既に指摘されている［森安2015C, pp. 11-12；濮仲遠2015, p. 72］。彼らは、突厥第二可汗国が682年に建国されると、その支配下に入っていたが、独解支の頃に支配から脱して甘州へと移住した、「河西南走部」[14] と称されるウイグル集団の首長一族である（地名は稿末地図参照のこと）。その南遷時期は、691（天授二）年以降、704（長安四）年以前［石附2011, p. 240］とされている。[15]「河西南走部」はこれ以後、漠北の集団とは別に、唐の支配のもとで活動することとなった。

その後、独解支の子である伏帝匐が嗣聖中に後を継ぐと、河西に置かれた最大規模の軍団である赤水軍の主力となるほどに、集団は大規模化したとされる［石附2011, pp. 244-245］。ところが、その子の承宗の時代である727（開元十五）年に大きな事件が発生する。当時瀚海大都督であった承宗が河西節度使王君㚟と対立し流刑に処された事件である。そして、報復に族子の護輸が王君㚟を殺害したのである。

その後の護輸の行動には史料に大きな混乱がある。『旧唐書』巻一〇三「王君㚟伝」［p. 3192］は吐蕃に逃げたとする一方、『旧唐書』巻一九五「迴紇伝」［p. 5198］では唐軍に討たれて漠北烏徳健（オテュケン）山に逃れたとしており、同じ『旧唐書』でも混乱がある。一方、『新唐書』巻二一七上「回鶻伝上」［p. 6114］では、護輸が漠北に逃げ、子の骨力裴羅が立つとしており、『旧唐書』にはない情報を載せている。骨力裴羅は後の初代ウイグル可汗である。

このように、河西南走部がウイグル可汗国の王統と直接つながるとするのが『新唐書』の伝である。とはいえ、この情報を鵜呑みにするのは危険である。なぜなら、『新唐書』「回鶻伝」はそもそも信頼を置きがたい史料である［西田2011］上に、栄新江［1991, pp. 292-293］が、護輸が吐蕃に走った後に突厥に帰属したとしても数百人規模であり、ほとんどのウイグル人は涼州に残存しただろうと指摘しているからである。少人数で命からがら漠北に

逃れたはずの護輸の子が、突如ウイグルの首長になっているのは不自然だろう。『新唐書』「回鶻伝」は、河西の集団と漠北の集団をつなげるために親子関係を捏造した可能性が高い。

以上のように、護輸が漠北に逃れたとするところまでは可能性があるにせよ、河西南走部とウイグル可汗国の王統に連続性を見て取ることは難しい。[16] 磨延啜と回紇瓊を堂兄弟であると記す墓誌の記述は、虚偽の記載であると見なすほかなさそうである。

第2節 「李秉義墓誌」に見える「堂弟」

さて、前節では、「回紇瓊墓誌」に見える「堂弟」が虚偽であることを指摘した。では、問題の「李秉義墓誌」についてはどうだろうか。

第1章で述べたように、李秉義は「登里頡咄登蜜施合俱録英義建功毗伽（テングリ=イル=トゥットミシュ=アルプ=キュルッグ ビルゲ）可汗」すなわち牟羽可汗の「堂弟」であると記されている。この記述の真偽を明らかにするためには、父親である移建啜（イェゲン=チョル）Yegän Čor の事績から検討しなければならない。

父親の事跡として【史料1】の5-8行目には次のようにある。

> 父は移建啜（イェゲン=チョル）であり、玄宗期にはいつも風化を仰ぎ見て朝見し、忠節を尽くして臣下となり、（匈奴の）休屠王の志を継ぎ、（匈奴の）金日磾の功績を継いでいた。ある時には命令を受けて兵甲をまとい、遠征して勝利し、ある時には寵愛を受けて宮中に近侍し、宿衛に参加する栄誉を得た。（帰国せず）留まって天子に仕え続けたいと願い出たので、寒冷なる郷土を遠く望み見るだけとなった（＝故郷に帰らなかった）。そこで、崇義王の爵位を与えられ、（皇室の）李氏の姓を下賜された。[17]

この記述から、李秉義の父の移建啜は玄宗期に帰順し、従軍や侍衛などの活動をしていたらしいことが分かる。では、彼の属していた遊牧集団はどこだったのだろうか。

この問いに関して、まだ墓誌が公表される前に、森安［2015C, pp. 10, 13］は次の漢籍の記述に着目していた。

【史料 3】『冊府元亀』巻九七六「外臣部 褒異三」［宋版 p. 3883；明版 p. 11461］
（大暦）七年四月四日、迴紇王子・左武衛員外大將軍・李秉義が亡くなったので、天水郡王を追贈し、葬儀を官費より支給した。京兆尹に葬儀の監督をさせた。秉義は唐に帰順して宿衛に入っており、そのため李姓を賜った。亡くなるにおよんで、皇帝は弔意を表し、そこで優遇を加えたのである。[18)]

【史料 1】15 行目では三月五日とされる死去の月日が合わないこと、同じく 19 行目では京少尹となっている監護の官が京兆尹となっていることを除けば、【史料 1】の記述とこの【史料 3】の記述は合致する。森安は、李秉義が死後「天水郡王」を追贈されたという記述に基づき、天水郡（秦州）の方角から考えて李秉義もやはり回紇瓊と同じく河西南走部の一員だったのだろうと推測した。

しかしながら、爵位だけからそのように結論付けるのは難しい。やはり李浩［2016, pp. 494, 506-507］が紹介しているウイグル人移建勿の墓誌 5 行目によれば、移建勿は「会寧郡王」を与えられている。会寧郡とは長安から西北方の「会州」のことであり、隋代に天山方面より逃れて隋に帰順した突厥王族、達度闕（タルドゥ=キョル）Tardu Kölが遊牧していた土地である［『隋書』巻八四「北狄伝西突厥」（p. 1879）］。それゆえ、遊牧民と関わりがないわけではなく、長安の西方に位置する地名であるからには、彼もまた河西南走部の出身であるようにも考えられようが、そうではない。この墓誌について詳しい検討をする余裕はないが、墓誌の 9-11 行目のみ示すと、以下のような記述がある。

皇帝陛下（＝代宗）は、今の可汗（＝第 3 代牟羽可汗）には戦場での功

績（＝安史の乱の功績）があり婚姻関係を結んでいる（＝寧国・小寧国公主の出嫁）ことから、その子弟や将帥たちで来訪朝見する者は皆厚遇した。王（＝移建勿）が質子となって天子に朝見することは、すでに皇帝二代（粛宗・代宗）を経ていたのだが、病没してしまった。[19)]

この記述から、移建勿がウイグル可汗国の出身で、安史の乱後に唐の質子になっていたことは疑いなく、河西南走部とは無関係である。爵位の方角から出身集団を推測することはできないのである。それゆえ、李秉義の場合も、爵位だけから河西南走部の一員であると言うことはできない。

そのうえ、墓誌に記された歴史的事実からも、李秉義は河西南走部の出身であると考えにくい。上で引用した【史料 1】5-8 行目にあるように、彼は父親の代の玄宗期に帰順したのであるが、前章で見たように河西南走部の移動は武則天期と見られている。開元十五年に反乱が起きたとはいえ、その集団の大部分は継続して唐に臣属して新たな瀚海都督の伏帝難を迎えているので、玄宗期に帰順したと見なすことはできないのである。唐に帰順した遊牧民はその帰順時期を、偽ってでも古くしたがる傾向がある［山下 2011, pp. 6-7, 11, n. 28］なかで、あえて、玄宗期から臣下となったという書き方をする必要はないため、実際に玄宗期に帰順したと見なさなければならない。以上の理由から、李秉義は河西南走部とは別の時期に帰順した集団の出身と考えられる。

そこで、代わりに出身集団として浮上してくるのが、「河東南走部」[20)] である。この集団は、716（開元四）年に漠北で突厥第二可汗国第 2 代のカプガン可汗黙啜が、拔曳固部の頡質略に殺害された際に、漠南へと南遷した集団である。『旧唐書』巻八「玄宗本紀上 開元四年是夏条」［p. 176］では、「ウイグル・同羅・霫・勃曳固・僕固の五部落が帰順してきたので、大武軍の北に安置した」[21)] とあって、その中にはウイグルも含まれていたことが分かる。大武軍は代北の朔州に置かれた鎮軍であり［『唐会要』巻七八「諸使中節度使」（p. 1687）］、河東南走部は朔州で遊牧生活を行っていたものと思わ

れる。

この、河東南走部の一員が李秉義の父親の移建啜だと考えれば、玄宗期に帰順したという墓誌の記述と合致する。さらに、既に石附［2011, p. 250］に指摘があるように、この遷徙は部族単位の大規模なものであり、彼らは天兵軍大使の指揮の下で、河東の軍事上の要衝に配置され、防衛任務を担っていた。それどころか、唐は上記の制勅が出された直後に大規模な突厥攻撃を計画しており、ウイグルもほかの帰順した部族とともに、その作戦に従軍したと見られている［石附 2011, p. 251］。これらの防衛・侵攻の軍事行動が、【史料 1】6 行目に「ある時には命令を受けて兵甲をまとい、遠征して勝利し（或命衣玄甲、遠掃邊陲）」という表現で記されているのである。そして、移建啜の軍事貢献と長安での宿衛（寵侍　軒墀、榮參警夜）の功績により、最終的に彼は崇義王の爵位と李氏を賜姓されるにいたったと考えられる。

ところで、河東南走部ウイグルの首長は、『冊府元亀』巻九九二「外臣部備禦五」［宋版，p. 3999；明版，pp. 11651-11652］所収の開元六年二月戊子の制勅[22]によると、「迴紇可汗（ママ）都督移健頡利發（イェゲン=エルテベル）」とある。可汗は衍字と見られ、彼は羈縻州府長官クラスの称号である都督と、集団の首長クラスの称号であるエルテベル eltäbär[23] を帯びている。では、李秉義の父親である移建啜と、この移健頡利発とは、関係があるのだろうか。

そこで、移建啜が唐から与えられた爵位である「崇義王」について見てみよう。このような地名と関わらず、外来民の徳化を表すような語句を帯びた王号の爵位は、「徳化王」と呼ばれ、唐国外の勢力に与えられたほか、内属した外来民にも与えられることがあったとされる［金子 2019（1986）, p. 393］。内属して徳化王を与えられた人物として、モンゴル高原東部の遊牧民である奚の李詩が、732（開元二十）年に「部落五千帳」を率いて帰順し、帰義王の爵位を与えられた上で帰義州都督とされた例がある[24] ほか、年次は不明ながら、同じく奚の李娑固[25] が昭信王と饒楽都督を与えられた例［『旧唐書』巻一九九下「北狄伝 奚国」（pp. 5354-5355）］や、745（天宝四）年以前に、契丹の松漠都督李懐節が崇順王となっている例［『冊府元亀』巻

九七九「外臣部 和親二（宋版，p. 3908；明版，p. 11504）」もあり、羈縻州府長官クラスの官称号である都督を帯びた人物が徳化王となっている。

奚・契丹の例を河東南走部ウイグルに当てはめて考えれば、崇義王を与えられた移建啜もまた、羈縻州府長官クラスの人物であったと考えられよう。すなわち移建啜こそが、河東南走部ウイグルの首長であり、都督として『冊府元亀』に記録された「移健頡利発」と同一人物だと見なせるのである。両者の名称は異なるものの、「移健頡利発」という名も、「移建啜」という名も、どちらも「頡利発（エルテベル）」、「啜（チョル）」という官称号を記録しているに過ぎないため、彼の個人名は別にあり、官称号が変化したと考えればよいだろう。彼は首長であったために、徳化王の位を得ることができたのである。

このように見てみると、開元年間に突厥第二可汗国から唐へと帰順したウイグル首長の息子である李秉義が、ウイグル可汗国の3代目である牟羽可汗と、いとこ同士である可能性は極めて低いと言わざるを得ない。第1節で検討した「回紇瓊墓誌」と同じく、この墓誌もウイグル可汗との血縁関係を偽称していると考えるのが自然であろう。

以上の検討から、可汗と「堂弟」と記す回紇瓊・李秉義の両墓誌は、ともにウイグル可汗との関係を偽っている可能性が高く、その出自は突厥第二可汗国時代に唐に帰順した、別々のウイグル集団にあることが明らかとなった。

では、血縁を偽称した回紇瓊と李秉義は、実際には可汗とどのような関係を持っていたのだろうか。次章では、この点を検討したい。

第3章　漠南のウイグル集団とウイグル可汗国

第1節　河西南走部とウイグル可汗国

回紇瓊とウイグル可汗磨延啜との関係は、前述したように安史の乱で長安・洛陽奪還戦に参加した時に現れる。回紇瓊が安史の乱に従軍することとなった経緯を濮仲遠［2015］の説によりながら確認しておく。

第1章で詳述したように、ウイグルの河西南走部では、瀚海大都督であっ

た承宗が、727（開元十五）年に河西節度使王君㚟と対立して流罪になり、護輸による王君㚟殺害へと発展した。この時、空位となった瀚海都督に新たに就任した人物として、『資治通鑑』巻二一三「開元十五年九月条」［p. 6779］は「伏帝難」をあげる。

伏帝難が何者か、漢籍の記述からは詳細が分からないのだが、濮仲遠［2015, p. 72］は、この伏帝難こそが墓誌の回紇瓊だと指摘する。伏帝難がトルコ語名であり、瓊が漢語名であると理解するのである。

確かに、【史料2】には5行目に「姓迴紇、字瓊」とあって、字だけが記録され諱が不明である。それゆえ、その諱が伏帝難であると解釈することは可能であろう。さらに1-2行目の誌題には、「大唐故瀚海都督・右領軍衛大将軍・經略軍使迴紇府君墓誌銘并序」とあり、瀚海都督の肩書きが見える。

この2点から、濮仲遠は回紇瓊＝伏帝難説を提唱しているのであり、従うべきである。上述したように彼は706年生まれであり、承宗・護輸の反乱が起きたのは727年のことなので、数え22才で瀚海都督となったことになる。

彼が瀚海都督になった経緯に関係して、【史料2】の7行目には、「公は最初執戟の官職を拝受し、後に郎将の官職に移り、さらに将軍の官職を拝受した（公初拝執戟、後遷郎将、旋拝将軍）」という記述がある。濮仲遠は、これらは南衙十六衛の官職であることから、当初禁衛に入侍していた回紇瓊が、河西南走部の混乱を解消するために長安から呼び戻されたのであろうと推測する。これも従うべきであろう。

というのも、唐代に長安で宿衛になっていた遊牧首長の近親者が、自集団の危機に首長として帰還する例は、ほかにも見えているからである。たとえば、738（開元二十六）年に吐谷渾の可汗であった慕容曦光が死去した後、一族の曦皓が長安の宿衛から吐谷渾集団に戻り、新たな可汗となったことが挙げられる［村井 2003, pp. 35-37］。[26] さらに、トルコ系遊牧民の鐸地直侍も、理由は不明ながら、680（永隆元）年以前に、宿衛から自集団に帰り首長となったと考えられる［林／齊藤 2017, pp. 114-115］。宿衛に入った者がいざという時に首長を嗣ぐのは、唐では一般的だったようだ。それゆえ、回紇瓊

がウイグル集団で起きた混乱を解消するために長安から帰還したと考えるのは妥当である。

瀚海都督となった回紇瓊は、その後吐蕃との戦闘に参加した。それが、【史料 2】8 行目に、「天子に素晴らしい策略を献上し、吐蕃の要害を途絶させた（獻　　天子上策、斷土蕃之右臂）」とある一文である。濮仲遠［2015, p. 72］は、この記述は唐が 729（開元十七）年に吐蕃の石堡城[27]を攻撃して奪取した事件のことであり、回紇瓊は河西節度使麾下で、配下の赤水軍を率いてこの戦闘に参加したと指摘する。

さらに、安史の乱が発生し、翌年に粛宗が霊武で即位した後、757（至徳二）年に鳳翔まで移動してくると、『資治通鑑』巻二一九「至徳二載二月条」［p. 7018］に、「粛宗が鳳翔に到着した 10 日ほどの間に、隴右・河西・安西・西域の兵が皆集結した（上至鳳翔旬日、隴右・河西・安西・西域之兵皆會）」とあって、唐側に与する周辺の兵力が結集することとなった。濮仲遠［2015, p. 73］は、この時に回紇瓊も河西の軍団の一部として粛宗軍に加わったと指摘する。

一方、同じ 757 年九月には、ウイグルが葉護（ヤブグ）yabγu と兵 4 千人を、唐への援軍として鳳翔へ派遣した［『資治通鑑』巻二二〇「至徳二載九月丁丑条」（p. 7032）］。唐は広平王俶（後の代宗）を司令官として、ウイグルの援軍や僕固懐恩率いる遊牧兵を進攻させて同月中に長安を回復し［同上（p. 7034）］、翌月には洛陽も一旦は奪還することになる［同上「至徳二載十月条」（p. 7040）］。

この戦闘に、回紇瓊も加わっていたと見られるのである。前半部は既に引用したが、【史料 2】にはこの遠征と関わる 11-13 行目の記述がある。

> 先頃安禄山が反乱を起こしたとき、（回紇瓊の）「堂弟」の可汗は、兵力は強く勇猛であったので、長安・洛陽を回復する勝利をおさめた。（瓊は）功績はあげたがまだ（賞賜を）受けていなかったため、ついで長安にやってきたが、まだ宮中に拝謁する前に、まもなく病気になった。乾

元三（760）年三月二十九日に群賢里の自宅で死去した。[28)]

この墓誌の記述によれば、両京奪還後、回紇瓊は褒賞の授与を待っていたようだが果たされず、わざわざ長安まで出向いたところで亡くなったようである。洛陽奪還から実に2年以上が経過していた。死去時点ではまだ安史の乱は終結しておらず、唐に論功行賞まで行う余裕はなかったのかもしれないが、ウイグル葉護が洛陽奪還直後に、長安で祝勝の宴を受けて帰国している［『資治通鑑』巻二二〇「至徳二載十月癸酉条」（pp. 7043-7044）］ことと比べれば、軽んじられているのは明らかである。まかりまちがっても、回紇瓊が磨延啜と同行してともに祝宴に参加するようなことはなかったのであろう。河西南走部はウイグル可汗国と関わって、なんかしらの恩恵を受けることはできなかったようである。それゆえ、墓誌が「堂弟」と称するウイグル可汗磨延啜とも、接点は特になかったと考えるべきであろう。

第2節　河東南走部とウイグル可汗国

では、李秉義の属す河東南走部はどうだろうか。李秉義もまた、安史の乱に際して従軍していたことが、【史料1】の9-12行目から分かる。

> 粛宗期に、（公は）賊臣（＝安禄山）が反乱を起こしたのを痛ましく感じ、夏后氏（禹のように禅譲を受けた天子、粛宗）が即位することに思いを馳せたので、そのまま凶賊を討伐するのを助け、国内を平定するのを助けると、その名は（功績を記した）金文に刻まれることとなり、その行動は（勲功を記した）軍旗に書き連ねられることとなった。今上皇帝（代宗）は、往時の皇太子だった時に、上奏して討伐に出向き、軍旗を掲げて自ら征伐軍を出したので、公はさらに自分の兄弟を引き連れ、先鋒で猛撃を加え、隊列に加わるたびに、軍勢は風よりも速かった。万の敵の中から相手の軍旗を引き抜き、百の軍鼓のもとで敵の首級をあげた。[29)]

このように、李秉義は粛宗のもとで安史の乱の平定に参加し、さらに即位前の代宗に率いられて戦闘に参加したようである。代宗が率いた戦闘といえば、本章第1節で見た757（至徳二）年の両京奪還戦なので、回紇瓊と同じく、李秉義もやはり唐側で従軍していたのである。しかも、その従軍は、兄弟（棣華）を率いてのものであったと墓誌に記録されている。おそらく彼は、河東南走部の集団とともに従軍したのであろう。残念ながら、墓誌からはそこまでしか安史の乱中の李秉義を動きを追うことはできない。

ところが、その後、李秉義と関係する人物が漢籍中に一度だけ姿を現すのだが、この記事は先行研究でも取り上げられていない。それが、762（宝応元）年、史朝義の拠る洛陽を唐が再奪還した際の記述である。

> 【史料4】『冊府元亀』巻九七三「外臣部 助国討伐 宝応元（762）年十月条」［宋版，pp. 3866-3867；明版，p. 11435］
> おりしもウイグルが洛陽にやって来ると、ほしいままに残忍な行為を行い、死者・負傷者は一万人以上になったが、代宗は「外蕃」の功績が高かったことから、特別にこれを容認し、回紇達啜の息子の骨禄俟斤（クトゥルグ=イルキン）Qutluγ Irkinに対して、父の地位を継承させ特進・崇義王として宿衛に留め、孫[30]の闕達干（キョル=タルカン）Köl Tarqanは員外羽林将軍として帰国を許可した。[31]

この洛陽再奪還戦で唐側が勝利したことにより、安史の乱はほぼ決着することとなった。そのため、戦後にウイグル人に対して論功行賞が行われたようで、ここでは、骨禄俟斤と闕達干の2人に、官位が与えられたことが記録されている。そのうちの前者が与えられた爵位は崇義王であるが、【史料1】7行目で、李秉義の父の移建啜が唐から与えられた爵位も崇義王であった。そのことは、【史料4】に、「父の地位を継承させ（襲父）」たと述べられていることにも合致する。それゆえ、父を継いで崇義王を与えられ、「宿衛に留め（留宿衛）」られた骨禄俟斤が、移建啜の息子であることは間違いない。

しかしながら、この骨禄俟斤が李秉義本人であるかは明らかではない。

【史料 1】8 行目には李秉義は第 4 子であると書かれていて、少なくともほかに 3 人の兄弟がいるうえに、【史料 1】には李秉義自身が崇義王になったとは書かれていないからである。

とはいえ、李秉義自身もこの時恩賞を与えられたことは間違いないようだ。というのも、【史料 1】で、13-15 行目にかけて次のようにあるからである。

> （代宗）皇帝が即位するに及んで、これまで記録してきた功績を論じたところ、左武衛将軍を授けられ、特別に爵位を加えられ、封地を与えられる幸いをたまわった。[32)]

代宗の即位は 762（宝応元）年四月［『旧唐書』巻十一「代宗本紀」（p. 268）］なので、同年十月のことである【史料 4】の時期と矛盾しない。「特別に爵位を加えられ（特加茅土之封）」たという記述が、崇義王を継承したことを指しているかは不明だが、なんらかの爵位は与えられたのであろう。【史料 4】の記事に、移建啜の孫の闕達干にも員外羽林将軍の官職が与えられていることも考慮に入れれば、移建啜の一族全員になんらかの恩賞が与えられたのではなかろうか。

つまり、【史料 4】の記述は、代宗即位に際して行われた、安史の乱の論功行賞の記事であり、河東南走部の首長一族への恩賞を記録した記事だったとみなせるのである。その結果、李秉義自身は墓誌にあるように左武衛将軍を授けられて長安で宿衛を行うこととなった。それゆえ、墓誌の 15-16 行目にあるように、李秉義は長安の自宅で死去した。そして、闕達干は草原に戻ることが許されたようである。

ところが、この【史料 4】の記述には奇妙な点がある。それは、骨禄俟斤と闕達干が、「外蕃」の 1 人として褒賞を与えられていることである。「外蕃」とは、唐令にも現れる特別な用語であり、たとえば開元二十五年令と見られている『天聖令』「不行唐令」[33)] の「賦役第十二条」［pp. 59-60, 271］には、「「外蕃」の人で唐に帰順した者には、十年給復せよ（外蕃之人投化者、復十

年)」という記述がある。この条文を検討した石見［1998A（1987), pp. 136-137；1998B（1995），pp. 157-160；2009, pp. 7-12］は、「外蕃の人」とは広く「外国人」の意味であると指摘しており、それならば、「外蕃」もまた広く「外国」の意味になるであろう。

また、法令以外の同時代の記述にも外蕃＝外国の表現は現れている。僕固懐恩が安史の乱終結直後に送った上奏文では、反乱平定後にウイグルの帰国を懐恩が見送ったことを言う記述に、「私めは賊を平らげて帰還してより、天子の恩寵によりさらに（ウイグルの）送別をさせていただきました。私めはそのまま、一家の財産を傾けて国のために間を取り持つこととなり、「外蕃」（＝ウイグル）を出発させ、君主の道を実現しようとしたのです」［『旧唐書』巻一二一「僕固懐恩伝」（p. 3484)］[34] とあって、ウイグルを「外蕃」と表現している。[35]

以上の用例より見れば、李秉義が恩賞を受けたのは外国、つまりはウイグル可汗国に対する褒賞の一部であったことになる。その後、763（広徳元）年七月に、ウイグル可汗・可敦（カトゥン）をはじめ、左右シャド以下全員に恩賞が与えられている［『資治通鑑』巻二二三「広徳元年七月条」（p. 7145)］ことも、その一環としての恩賞だったと見なすことができるだろう。

しかし、李秉義たち河東南走部は親の代の開元年間に唐に帰順した集団の一員であり、「外蕃」ではないはずである。【史料 4】に、「父の地位を継承させ」たと述べているように、移建啜が爵位を持っていることを唐が把握しているにもかかわらず、彼らが「外蕃」の一部として論功行賞を受けていることは重要だろう。唐にとって、河東南走部はこの段階でウイグル可汗国に所属する「外蕃」と認識されていることを示すからである。

とすれば、彼らはウイグル可汗国と行動をともにしていた可能性が高いだろう。河西南走部の回紇瓊が恩賞を受けられなかったように、ただ従軍しただけでは唐が恩賞を与えるとは考えにくい。ウイグル可汗などへの恩賞の一環であること、【史料 4】でウイグルへの恩賞が引き合いに出されていることから考えれば、彼ら河東南走部は、ウイグル可汗国軍の一員として恩賞を

受けたと見なすことができよう。

では、なぜ河東南走部はウイグル可汗国軍と行動をともにしていたのか。そもそも彼ら河東南走部は、漠北の政変によって亡命してきた人々であり、唐の北辺でくすぶっていた集団であった。それゆえ、同族でもあるウイグル可汗国の遠征軍は、その地位を向上させるために極めて魅力的に映ったであろう。一方、ウイグル可汗国からしても、彼らは貴重な同族の騎馬戦力だったはずである。というのも、遊牧民は個々人が優秀な騎兵となるが、その反面人口が寡少であるため、漠南に逃れ唐に帰順した同族はウイグルにとって貴重な人材となりうるからである。お互いに利益を得られる間柄だったと考えれば、ウイグル可汗国軍に李秉義が加わっていたとしても不思議ではないのである。[36)]

李秉義をウイグル可汗国の一員として捉える視点から改めて史料を見直してみれば、【史料 1】1 行名の誌題には「唐故迴紇贈天水郡王李府君墓誌銘并序」とあって李秉義がウイグルの人であると明記されているし、17-18 行目には、「皇帝は、公はウイグル可汗の兄弟であって、（可汗は）唐王朝と婚姻を結んでおり、（彼自身は）禁軍の忠臣であるので、思い返すに第一の勲功があった、とみなした」[37)] とあって、ウイグル可汗国の人であることを前提としている。また、李秉義が死去したことを伝える【史料 3】にも、「迴紇王子」とあって、やはり李秉義をウイグル可汗国の王族として扱っている。

このように、李秉義たち河東南走部は、ウイグル可汗国と密接な関係を作ることに成功し、安史の乱で唐から恩賞を受けることができたのである。

おわりに

本稿では、新出の「李秉義墓誌」と既知の「迴紇瓊墓誌」とを検討し、ウイグル可汗を被葬者の「堂弟（いとこ）」と記録する両墓誌の記述を、両者の歴史的背景から検討した。その結果、回紇瓊は武則天期に唐に帰順した河西南走部と呼ばれるウイグル集団に属し、李秉義は河東南走部と呼ばれるウイグ

ル集団に属していて、両者ともウイグル可汗国とは直接関係なく、両墓誌が記すような近い血縁関係にある可能性は極めて薄いことが明らかとなった。

両者ともに安史の乱に際して唐側で参戦したが、回紇瓊はウイグル可汗国とのつながりも見られず、褒賞ももらえずに死去した。李秉義は762年の代宗即位後にウイグル可汗国の一員として論功行賞の対象となり、長安で宿衛に入り、長安で死去した。彼が「外蕃」と見なされていることから、彼ら河東南走部は安史の乱当時、ウイグル可汗国と密接な関係を形成することに成功していたと見られる。ウイグル可汗国と漠南のウイグル遊牧民との間で、連動した動きが見られるのである。

このように、彼らは長らく唐に帰順していたウイグル集団であり、ウイグル可汗国の建国時には漠南にいて直接関わりのない人々であった。それどころか、李秉義はウイグル可汗国と関係を持っていたものの、回紇瓊はウイグル可汗国と生涯関係を持たずに死去している。そして、李秉義のいた河東南走部と、回紇瓊のいた河西南走部との接触も、確認することはできない。

それにもかかわらず、お互いに関係性を持たない両墓誌ともに、ウイグル可汗を「堂弟」と記述し、血縁関係を偽称していることは注目に値しよう。彼ら漠南のウイグル集団がウイグル可汗国王家のヤグラカル氏に対して、同族意識を形成しようとしていたことを意味するからである。

そもそも回紇瓊も李秉義も、王族のヤグラカル氏かどうか、墓誌からは明らかではない。ウイグル可汗国と直接関わりなく、王族であったかどうかも不明な人々であるが、それでもウイグル王族と偽称しようとしたのは、漠南に逃れたウイグル部族の中にも、漠北の集団との間にゆるやかな同族意識が形成されつつあったことを示している。漠南に逃れてきたとはいえ、彼らは漠北と関係が切れたわけではなく、南北のつながりは常に意識されていたのである。

別の見方をすれば、ウイグル可汗国は、漠南に逃れた同族たちにとっても部族意識の中核になるほど、強いインパクトを持って草原世界に登場したということでもある。同じトルコ系遊牧民である突厥第二可汗国の事例を比較

に出せば、唐の羈縻支配から脱して新たに王統を築いた阿史那骨咄禄（クトゥルグ）の一族は、突厥第一可汗国の血統とは、同じ王族阿史那氏とはいえ、直接つながらないにもかかわらず、突厥第一可汗国の始祖、ブミン可汗の直径であると偽称しているという［鈴木2008, pp. 149-145］。

同様に、漠南のウイグルでも、直接血縁がつながらない同族との血縁関係を詐称し、同族意識を醸成しようとしているのである。突厥第一可汗国が突厥の同族意識の中核となったように、ウイグル可汗国が建国されたことによって、漠南をも巻き込んだウイグル同族意識の中核が形成されたのであり、それは漢語を用いた墓誌にまで現れるほど、強いインパクトを持っていたことがこれらの墓誌から明らかとなる。突厥からウイグルへと草原の中心が移り変わる様子を、これらの墓誌は示していると言えるだろう。

最後に課題を述べて本稿の締めとしたい。本稿では十分検討しきれなかったが、唐に対して優位を保ったウイグル可汗国が、漠南の遊牧民といかなる関係を持ったか、さらなる検討によって明らかにしていかなければならない。[38] その作業を通じて、唐代後半期の新たな国際関係の中にあって、境界地帯である漠南の遊牧民が南北両勢力にどのような役割を果たしたのか、考察を続けていきたい。

［注］

1） 東部ユーラシア史とは、論者によって定義が異なるものの、大まかにいってパミール以東の乾燥地域と、中国を中心とする農耕湿潤地域とを、連動する歴史世界と捉える視点である。これまでの議論については、古畑［2019］が先行研究を明解にまとめているほか、『唐代史研究』23号（2020年）が特集号を組んでいるため、そちらに掲載された各論文も参照されたい。

2） このテーマに関して、筆者これまで突厥第一・第二可汗国期に関するいくつかの論考［齊藤2011, 2013, 2015, 2016A, 2016B］を発表してきた。

3） ウイグル可汗の系譜については山田［1989（1951）］・羽田［1957］・森安［1991］に従う。また、近年では村井［2018］が山田説の補強を行っている。

4） 安史の乱と草原都市建設の関係については、森安他［2009, p. 78］・松井［2014, pp.

262-264］を参照のこと。また、758年に紀年付けられるバイバリクの建設については、シネウス碑文西面5行目に記述がある［森安他2009, pp. 20, 31, 41］。

5） この点、先行研究ではほとんど言及がなく、わずかに、ウイグル可汗が親征した理由として、安史集団における突厥遺民集団を討伐するためだったと指摘した、カマロフ［Kamalov 2001］の所説などがある程度である。

6） 本稿では、紙幅の都合上、全文の和訳を掲載し語注を付すことができなかった。この点については別稿を期したい。

7） 李浩は「終」に作るが、拓本写真より改める。

8） ウイグル語の可汗号に対する漢字音写については、リバツキ［Rybatzki 2000, pp. 230-244］を参照のこと。

9） 加冊可汗為登里頡咄登密施含俱錄英義建功毗伽可汗。

10） 『旧唐書』の「含」が「合」の誤写であることは、既にシャバンヌ／ペリオ［Chavannes / Pelliot 1913, p. 188, n. 1, 4］が推測していた。

11） 唐代の用例では以下のものがある。『旧唐書』巻一二二「張献誠伝［pp. 3497-3498］「大暦二（767）年四月に、張献誠は病気を理由に上表して自宅に帰ることを請願し、さらに「堂弟」で試太常卿兼右羽林将軍の献恭を推薦して自分と交代させようとした。（中略）献恭は、（張献誠の父）守珪の弟の、守瑜の子である（大暦二年四月、獻誠以疾上表乞歸私第、仍薦堂弟試太常卿兼右羽林將軍獻恭以自代。（中略）獻恭、守珪之弟守瑜子）。」張献誠の父の弟の子が堂弟の献恭なので、正しく従弟の意味で使われている。

12） 本墓誌の拓本写真としては同書のものが最も鮮明である。その後、『西安碑林博物館新蔵墓誌彙編』（西安碑林博物館（編著）／趙力光（主編），線装書局，2007）［中巻，No. 199］にも拓本写真が掲載されたが、残念なことに誌石が破損したらしく、一部の文字が読み取れなくなっているので注意が必要である。

13） 師小群／王建栄は「記」、森安は「託」に作るが、拓本写真から「記」の異体字と判断する。

14） 突厥第二可汗国期に、2度にわたってウイグル本体から分離して漠南に逃れたウイグル集団がおり、河西回廊に移り住んだ集団を「河西南走部」、代北に移り住んだ集団を「河東南走部」と呼ぶ。この名称は石附［2011］の呼称による。

15） 南遷時期については、天授年間（690-692）説［小野川 1940, p. 29；Gabain 1952, p. 28；羽田 1957, p. 177］や垂拱年間（685-688）説［岩佐 1936, pp. 133-134, 165-166, n. 99；章群 1986, p. 129；栄新江 1991, pp. 287-291］もあるが、ここでは石附説に従う。

16） 先行研究では、護輸の漠北帰還に信を置くものが多い［小野川 1941, p. 34；Gabain 1952, pp. 29-30；羽田 1957，pp. 180-181；栄新江 1991, pp. 292-293；森安 2015C, p. 12］が、『新唐書』「回鶻伝」を採用する先行研究は管見の限りひとつもない。

17） 父移建啜　　玄宗朝嘗瞻風入覲、竭節為臣、嗣休屠之令猷、継日磾之茂績。或命

衣玄甲、遠掃邊陲、或寵侍　軒墀、榮參警夜。願留捧　日、絶望寒鄉。因封為崇義王、仍賜姓李。

18）七年四月甲寅、迴紇王子左武衛員外大將軍李秉義卒、贈天水郡王、葬事官給。令京兆尹充使監護。秉義歸國宿衛、因以賜姓。及卒、帝悼之、乃加禮優寵。

19）皇上以今可汗有戰伐之勲、結婚姻之好、其子弟將師来朝會者、皆厚禮之。王充質朝天、已更再葉、遇疾而歿。

20）集団の名称については注14を参照のこと。

21）其迴紇・同羅・霫・勃曳固・僕固五部落來附、於大武軍北安置。

22）原文と書き下しは石附［2011, pp. 249-250］を参照のこと。ただし、石附は『全唐文』巻二一「元宗皇帝」［p. 251］を底本としているため一部『冊府元亀』と字句の異動がある。

23）鉄勒諸部におけるエルテベル号については、護［1967（1964）］を参照のこと。

24）李詩は妻の墓誌が発見されており、そこでも李詩が帰義王を得たことが記録されている［森部2011A, pp. 254-255］。ただし、森部［2011A, p. 259］は李詩が「帰義州都督」になっていることから、「帰義」とは彼らの「得姓の地」である帰義州のことを指す可能性があると指摘している。そうだとすると徳化王と考えることはできなくなるが、この問題は他の用例とも比較して検討する必要があるため、現時点では保留して考察する。

25）『冊府元亀』巻九六四・九七一・九七三では「李婆固」とするが、本稿では『旧唐書』に従う。

26）吐谷渾慕容氏については、曦光・曦皓の間に曦輪というもう1人の兄弟がおり、曦光の死の直後に可汗になっていたことが「慕容曦輪墓誌」より判明した［濮仲遠2019；周偉洲2019, pp. 72-77；平田2020］。それゆえ、曦光の死後に曦皓が継いだとする村井説にそのまま依拠する本文は、厳密には問題がある。とはいえ、主題と関わらないため詳しく論じる余裕はないが、筆者は曦輪の後にやはり曦皓が呼び戻されて可汗に即位したという展開は変わらないと考えているため、変わらず村井説に依拠している。なお、「慕容曦輪墓誌」については、誌文に不自然な部分があり慎重に扱うべきとの指摘がなされている［平田2020, pp. 93-94］ため、注意が必要である。

27）石堡城の場所や沿革については小畑［1950, pp. 470-476］を参照のこと。

28）頃戎羯乱常、堂弟可汗、兵雄勇壮、収兩都之捷。功成未受、旋至上京、未見　闕庭、俄尓癉疾。以乾元三年三月廿九日、終于羣賢里之私第。

29）肅宗朝以痛賊臣之負國、思夏后之配天、遂翼翦鯨鯢、佐清區寓、名書彝鼎、動列太常。　今上往居藩邸之日、奉詞伐叛、杖節專征、公又率己棣華、先鋒霆擊、每登雁陣、勢疾風趨。搴旗於萬敵之中、取馘於百輦之下。

30）この字は宋版では「孩」に作るが、意味が通らないため、明版に従い「孫」に改める。

31）時回紇至東京、肆行殘忍、傷死者萬計、代宗以外蕃功高、特容之、以回紇達啜嬌子骨祿俟斤、襲父特進・崇義王、留宿衛、孫闕達干為員外羽林將軍、放還蕃。
32）洎　皇上握圖御極、論舊録功、授左武衛將軍、特加茅土之封、用錫河山之慶。
33）『天聖令』の「不行唐令」が開元二十五年令であることは戴建国［2008］を参照のこと。なお、この条文は『通典』巻六「食貨六 賦税下」［p. 109］に同文が収録されていたため、以前から周知のものであった［cf. 仁井田1933，p. 682］。
34）臣自平賊卻迴、天恩又令餞送。臣遂罄竭家産、為國周旋、發遣外蕃、貴圖上道。
35）景凱東［2020］も「蕃書」を検討するなかで「外蕃」も論じており、「外蕃」とは、「中国」と対応する概念として同時代史料に現れ、唐朝周辺の他政権を指すと指摘している。
36）李秉義の字である「末阿波」は、阿波が古代トルコ語 apa の音写であるため、トルコ語名であると考えられる。「末」が何の音を指すか現時点では鉄案がないが、「末摩尼 Mār Mani」などのようにシリア語の尊称 Mār の音訳に使われることがある［Pelliot 1904, p. 760, n.2］。この尊称はキリスト教東方シリア教会や、マニ教で使用されていたため、いずれかの宗教と関わりがあるのかもしれないが、現時点では可能性を示すに留めたい。特に、マニ教は 762 年前後からウイグル可汗国で信仰されるにいたるが、史料が極めて少ないことに加え、762 年以前にウイグルに入っていたかという大きな問題があり、軽々には論じがたい。マニ教のウイグルへの伝播については、以下の論文［Clark 2000; 2009; 森安 2015B（2013）；森安／吉田2019；Yoshida 2020；吉田2020］などを参照のこと。
37）皇上以公可汗金友、於國有婚姻之親、禁旅藎臣、念舊為勲庸之最。
38）おりしも古松［2020, p. 57］が、安史の乱に際してウイグルが、漠南の遊牧民を征討・併呑したと述べているのは、概説書であるため根拠は示されていないが十分可能性があり、より深く検討していく必要がある指摘である。

［参考文献］

○版本情報
『通典』／『隋書』／『旧唐書』／『新唐書』／『資治通鑑』（旧版）＝中華書局標点本
『冊府元亀』宋版・明版＝中華書局影印本
『唐会要』＝上海古籍出版社標点本
『天聖令』＝『天一閣蔵明鈔本天聖令校証』中華書局，2006

○研究
石附玲　2011：「唐前半期の農牧接壌地帯におけるウイグル民族――東ウイグル可汗国前史――」森安孝夫（編）『ソグドからウイグルへ――シルクロード東部の民族と

文化の交流――』汲古書院，pp. 237-265.
岩佐精一郎　1936：「突厥の復興に就いて」和田清（編）『岩佐精一郎遺稿』岩佐傳一発行，pp. 77-167.
石見清裕　1998A：「唐の突厥遺民に対する措置」『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院，pp. 109-147.（初出：『中国社会・制度・文化史の諸問題』中国書店，1987）
――――　1998B：「唐の内附異民族対象規定」『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院，pp. 148-175.（初出：『中国古代の国家と民衆』汲古書院，1995）
――――　1999：「ラティモアの辺境論と漢～唐間の中国北辺」唐代史研究会（編）『東アジア史における国家と地域』刀水書房，pp. 278-299.
――――　2008：「唐とテュルク人・ソグド人――民族の移動・移住より見た東アジア史――」『東アジア世界史研究センター年報』1，pp. 67-81.
――――　2009：「唐代内附民族対象規定の再検討――天聖令・開元二十五年令より――」『東洋史研究』68-1，pp. 1-33.
小野川秀美　1940：「鉄勒の一考察」『東洋史研究』5-2, pp. 1-39.
小畑龍雄　1950：「唐代隴右振武軍考」羽田博士還暦記念会（編）『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』東洋史研究会, pp. 453-476.
金子修一　2019：「唐代の異民族における郡王号――契丹・奚を中心にして――」『古代東アジア世界史論考――改訂増補隋唐の国際秩序と東アジア――』八木書店，pp. 373-398.（初出：『山梨大学教育学部研究報告』36, 1986）
齊藤茂雄　2011：「突厥「阿史那感德墓誌」訳注考――唐羈縻支配下における突厥集団の性格――」『内陸アジア言語の研究』26, pp. 1-38.
――――　2013：「突厥第二可汗国の内部対立――古チベット語文書（P.t.1283）にみえるブグチョル（'Bug-čhor）を手がかりに――」『史学雑誌』122-9, pp. 36-62.
――――　2015：「突厥有力者と李世民――唐太宗期の突厥羈縻支配について――」『関西大学東西学術研究所紀要』48, pp. 77-99.
――――　2016A：「隋末唐初期における突厥第一可汗国と北中国」『関西大学東西学術研究所紀要』49, pp. 121-138.
――――　2016B：「古代トルコ系遊牧民の広域秩序」『アステイオン』84, pp. 99-114.
鈴木宏節　2008：「突厥可汗国の建国と王統観」『東方学』115, pp. 157-141（逆頁）.
仁井田陞　1933：『唐令拾遺』東京大学出版会.
西田祐子　2011：「『新唐書』回鶻伝の再検討――唐前半期の鉄勒研究に向けて――」『内陸アジア言語の研究』26，pp. 75-139.
西村陽子　2018：「唐後半華北諸藩鎮の鉄勒と党項――沙陀系王朝成立の背景――」『唐代沙陀突厥史の研究』汲古書院，pp. 159-201.（初出：『東洋史研究』74-4, 2016）
羽田亨　1957：「唐代回鶻史の研究」『羽田博士史学論文集 上巻　歴史編』東洋史研究会，pp. 157-324.

林美希／齊藤茂雄　2017：「西安碑林博物館蔵「鐸地直侍墓誌」（唐・開元一一年）」『史滴』39, pp. 92-129.

平田陽一郎　2020：「唐・慕容曦輪墓誌」の訳注と考察」『沼津工業高等専門学校研究報告』54, pp. 87-94.

古松崇志　2020：『草原の制覇――大モンゴルまで――（シリーズ中国の歴史③）』岩波書店.

松井太　2014：「ソグドからウイグルへ」森部豊（編）『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉（アジア遊学175）』勉誠出版，pp. 261-275.

村井恭子　2003：「押蕃使の設置について――唐玄宗期における対異民族政策の転換――」『東洋学報』84-4, pp. 29-60.

――――　2015：「河西と代北――九世紀前半の唐北辺藩鎮と遊牧兵――」『東洋史研究』74-2, pp. 47-82.

――――　2018：「ウイグル可汗の系譜と唐宋漢籍史料――懐信と保義の間――」『東洋学報』100-2, pp. 33-65.

護雅夫　1967：「鉄勒諸部における eltäbär, irkin 号の研究」『古代トルコ民族史研究 Ⅰ』山川出版社，pp. 398-438.（初出：「東突厥官称号考――鉄勒諸部の俟利発と俟斤――」『東洋学報』46-3, 1964）

森部豊　2010：「安史の乱前の河北における北アジア・東北アジア系諸族の分布と安史軍の淵源」『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学東西学術研究所，pp. 59-87.

――――　2011A：「安禄山女婿李献誠考」関西大学東西学術研究所（編）『東西学術研究所創立六十周年記念論文集』関西大学出版部，pp. 245-269.

――――　2011B：「増補：北アジア世界と安史の乱」森安孝夫（編）『ソグドからウイグルへ――シルクロード東部の民族と文化の交流――』汲古書院，pp. 175-205.

――――　2013：「『安禄山』研究篇」森部豊（研究代表）『ソグド人の東方活動に関する基礎的研究』平成21年度～平成24年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書，pp. 9-46.

森安孝夫　1991：「東ウイグル可汗および西ウイグル国王のクロノロジー」『ウイグル＝マニ教史の研究』大阪大学文学研究科，pp. 182-185.

――――　2015A：「ウイグルから見た安史の乱」『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版社，pp. 2-48.（初出：『内陸アジア言語の研究』17, 2002）

――――　2015B：「東ウイグル＝マニ教史の新展開」『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版社，pp. 536-557.（初出：『東方学』126, 2013）

――――　2015C：「東ウイグル帝国カリチョル王子墓誌の新研究」『史艸』56, pp. 1-39.

森安孝夫／鈴木宏節／齊藤茂雄／田村健／白玉冬　2009：「シネウス碑文訳注」『内陸アジア言語の研究』24, pp. 1-92.

森安孝夫／吉田豊　2019：「カラバルガスン碑文漢文版の新校訂と訳注」『内陸アジア言語の研究』34, pp. 1-59, +1 pl.

山下将司　2011：「唐のテュルク人蕃兵」『歴史学研究』881, pp. 1-11.

――――　2014：「唐の「元和中興」におけるテュルク軍団」『東洋史研究』72-4, pp. 1-35.

山田信夫　1989：「九姓回鶻可汗の系譜――漠北時代ウイグル史覚書 1――」『北アジア遊牧民族史研究』東京大学出版会，pp. 107-127.（初出：『東洋学報』33-3/4, 1951）

吉田豊　2020：「9 世紀東アジアの中世イラン語碑文 2 件――西安出土のパフラビー語・漢文墓誌とカラバルガスン碑文の翻訳と研究――」『京都大学文学部研究紀要』59, pp. 97-269.

戴建国　2008：「《天聖令》所附唐令為開元二十五年令考」『唐研究』14, pp. 9-28.

古畑徹　2019：「何為東（部）欧亜史：近年来日本古代東亜史研究的新動向」『南開史学』2019-2, pp. 33-49.

景凱東　2020：「論唐代的蕃書類王言」『唐研究』25, pp. 341-360.

李浩　2016：「西安新見両方迴紇貴族墓誌的初歩考察」『唐研究』22, pp. 493-508.

濮仲遠　2015：「瀚海都督伏帝難考論――回紇瓊墓誌再探――」『陰山学刊』28-5, pp. 71-73, 86.

――――　2019：「唐代慕容曦輪墓誌考釈」『青海師範大学学報（哲学社会科学版）』41-1, pp. 73-77.

栄新江　1991：「唐代河西地区鉄勒部落的入居及其消亡」費考通（主編）『中華民族研究新探索』中国社会科学出版社，pp. 281-304.

師小群／王建栄　1990：「西安出土回紇瓊・李忠義墓誌」『文博』1990-1, pp. 90-92.

章群　1986：「蕃将総論」『唐代蕃将研究』聯経出版，pp. 35-117.

周偉洲　2019：「吐谷渾墓誌通考」『中国辺疆史地研究』29-3, pp. 65-79.

Chavannes, E. / Pelliot, P.　1913: Un traité manichéen retrouvé en Chine. *Journal Asiatique* 1913, pp. 99-199.

Clark, L.　2000: The Conversion of Bügü Khan to Manichaeism. Emmerick, R. E. et al. (eds.), *Studia Manichaica. IV. Internationaler Kongreß zum Manichäismus, Berlin, 14.-18. Juli 1997*, Berlin, pp. 83-123.

――――　2009: Manichaeism among the Uygurs: The Uygur Khan of the Bokug Clan. BeDuhn, J. D. (ed.), *New Light on Manichaeism: Papers from the Sixth International Congress on Mnichaeism*, Leiden / Boston, pp. 61-71.

Gabain, A. von　1952: Die Frühgeschichte der Uiguren: 607-745. *Nachrichten Gesellschaft für Natur- und Volkerkunde Ostasiens* 72, pp. 18-32, 48-49.

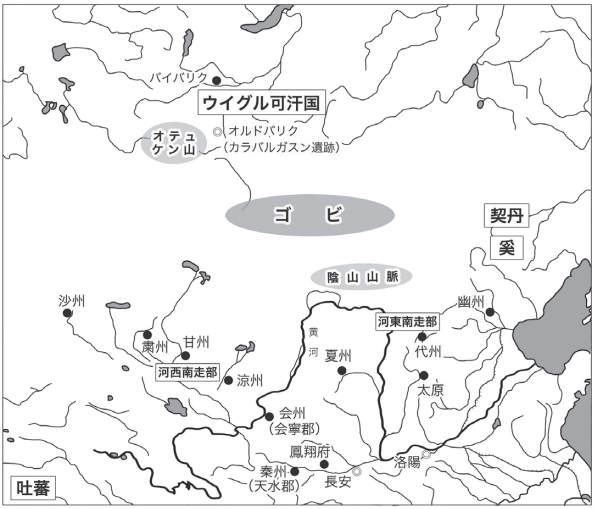
Kamalov, A.　2001: Turks and Uighurs during the Rebellion of An Lu-shan Shih Ch'ao-yi (755-762). *Central Asiatic Journal* 45-2, pp. 243-253.

Pelliot, P. 1904: Dr. F. W. K. Müller: Handschriften-Reste in Estragelo-Schrift aus Turfan, Chinesisch Turkestan. *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* 4, p. 760.

Rybatzki, V. 2000: Titles of Türk and Uigur Rulers in the Old Turkic Inscriptions. *Central Asiatic Journal* 44-2, pp. 205-292.

Yoshida, Y. 2020: Studies of the Karabalgasun Inscription: Edition of the Sogdian Version. *Modern Asian Studies Review* 11, pp. 1-139.

［参考地図］



『中国歴史地図集（隋唐五代十国時期）』地図出版社，1982, pp. 32-33を基にして作成

（文学研究科教務補佐員・京都大学人文科学研究所人文学連携研究者）

SUMMARY

Uyghur Nomads in Inner Mongolia under the Tang Dynasty and Uyghur Qaghanate:
A Study on the Epitaphs of Li Bingyi and Huihe Qiong

Shigeo Saito

This paper examines the veracity of the expression "Uyghur Qaghan's cousin (堂弟)" as used in the epitaphs of Li Bingyi (李秉義) and Huihe Qiong (回紇瓊). Li Bingyi and Huihe Qiong belonged to Uyghur refugee groups from the Second Türk Qaghanate in Inner Mongolia under the control of the Tang dynasty, and had no relations to Uyghur Qaghan. Therefore, the expression "Uyghur Qaghan's cousin" is fake.

Huihe Qiong was a Uyghur who belonged to "the refugee group of Hexi (河西南走部)". His group came to the Hexi area during Empress Wu's（武則天）era. He participated in the battle of the recapture of Changan (長安) and Luoyang (洛陽) against the rebellion of An Lushan in 757. After the battle, he visited Changan in 760 to claim a reward for his contribution to the battle, but he failed to get it. He was soon dead in Changan.

Li Bingyi was a Uyghur who belonged to "the refugee group of Hedong (河東南走部)". His group came to the Hedong area in the Kaiyuan (開元) era. Li Bingyi also participated in the battle in 757; he and his group members received rewards in 762. However, it is enigmatic that they were recognized by Tang as foreigners (外蕃). It is likely that their group merged into the Uyghur Qaghanate during the rebellion of An Lushan.

Although the fortune of these two Uyghurs who were not related to the Uyghur Qaghanate was quite different, both of them insisted on being related to the Uyghur Qaghan in their epitaphs. This case demonstrates that the ethnic identity among the Uyghurs in the various areas was formed with the Uyghur Qaghanate as the central figure.